

# ロシアレイヴシーン研究～Little Big登場の背景～



2020/05/31

DEEP ACID

# 目次

0. 前書き
1. 旧ソ連の音楽シーン
2. ソ連解体後の音楽シーン
3. ロシア・東欧のレイヴシーン
4. Little Big
5. 結論

# 0.前書き

今年のユーロビジョンでロシア代表のLittle BigがMV再生回数1億回を超え、ユーロビジョン史上最高再生回数になることは間違いない。ロシアのエントリーアーティストのMVのこのバズり方は想定を超えていて、Little Bigと言うアーティスト、さらにロシアの音楽シーンに興味を持った。

# 1.旧ソ連時代の音楽シーン(1)

ソ連時代の音楽シーンは(少なくとも日本では)ほとんど資料がない(早稲田大学の神岡理恵子先生が日本での数少ない研究者)。当然、共産党独裁体制下で、検閲も厳しく、ほとんど資料は出てこないし、ソ連国内でも体制に承認されたアーティスト以外はオープンにはなっていないと思われる。その中で、日本でもリーチ可能だったアーティストについて軽く紹介する。

# 1.旧ソ連時代の音楽シーン(2)

- ウラジミール・ヴィソツキー

Владимир Высоцкий

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%83%A9%E3%82%B8%E3%83%BC%E3%83%9F%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%BD%E3%83%84%E3%82%AD%E3%83%BC>

「ソ連のボブ・ディラン」と呼ばれるシンガーソングライター。

当時のソ連は西側諸国のウッドストックなどのフラワームーブメントからは情報がシャットアウトされていたものの、ほぼ同時期に屋外のフォークフェスティバルが行われていた。その代表的存在。もともとロシア人が詩を愛する国民性があり、メッセージ性の強いフォークミュージックとの相性が良かったと考えられる。

ヴィソツキーと並び、ブラート・オクジャフ Булат Окуджава、アレクサンドル・ガーリチ Александр Галич と並び、「O-B-Г」と呼ばれる。

# ウラジミール・ヴィソツキー



# 1.旧ソ連時代の音楽シーン(3)

- アラ・プガチョワ Алла Пугачёва

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%83%BB%E3%83%97%E3%82%AC%E3%83%81%E3%83%A7%E3%83%AF>

ソ連の国民的民謡(と言うか歌謡曲)歌手。「百万本のバラ」は加藤登紀子が日本語カバー(1983)し、ミリオンセラーになった。ソ連崩壊後も1997年のユーロビジョンのロシア代表となり、長く活躍した。

# アラ・プガチョワ





## 2.ソ連解体後の音楽シーン(1)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AD%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%81%AE%E9%9F%B3%E6%A5%BD>

- メジャーシーン

メジャーシーンは基本的に西側諸国の輸入がほとんどだが、ドメスティックなアーティストもそれなりにいる。また、アジア側ではK-POPの市場も大きい。

ロシアのヒットチャート: TOPHIT

<https://tophit.ru/ru>

## 2.ソ連解体後の音楽シーン(2)

- アンダーグラウンドシーン

体制崩壊直後、一時的に無政府状態になった訳で、この時代にアンダーグラウンドカルチャーが発展した(と言うより、崩壊前は通常の音楽マーケットは実質的に国営レーベル・メロディヤМелодияしかなかったため、多くのアーティストがインディペンデントレーベルを立ち上げてリリースした)。そのことは90年代のサブカル雑誌「BURST」(現在は廃刊)を始めとした各種週刊誌を通じて一部日本でも紹介されている。ドラッグカルチャー、バンクムーブメントなどが紹介されている。ヘヴィメタルも盛ん。

## 2.ソ連解体後の音楽シーン(3)

- レイヴシーン

ベルリンの壁崩壊を祝う90年代のレイヴパーティ「ラブ・パレード」は最盛期には150万人と言う途方もない観客を集め、伝説となった。その中にはPaul Van Dykのような東ドイツ側のDJ(壁崩壊から2年後の1991年にベルリンのトレゾア・クラブでDJデビュー)もいて、レイヴは壁崩壊前から東欧ソ連圏にもラジオ電波などを通じて密かに入り込んでいたと思われる。

## 2.ソ連解体後の音楽シーン(4)

- t.A.T.u.

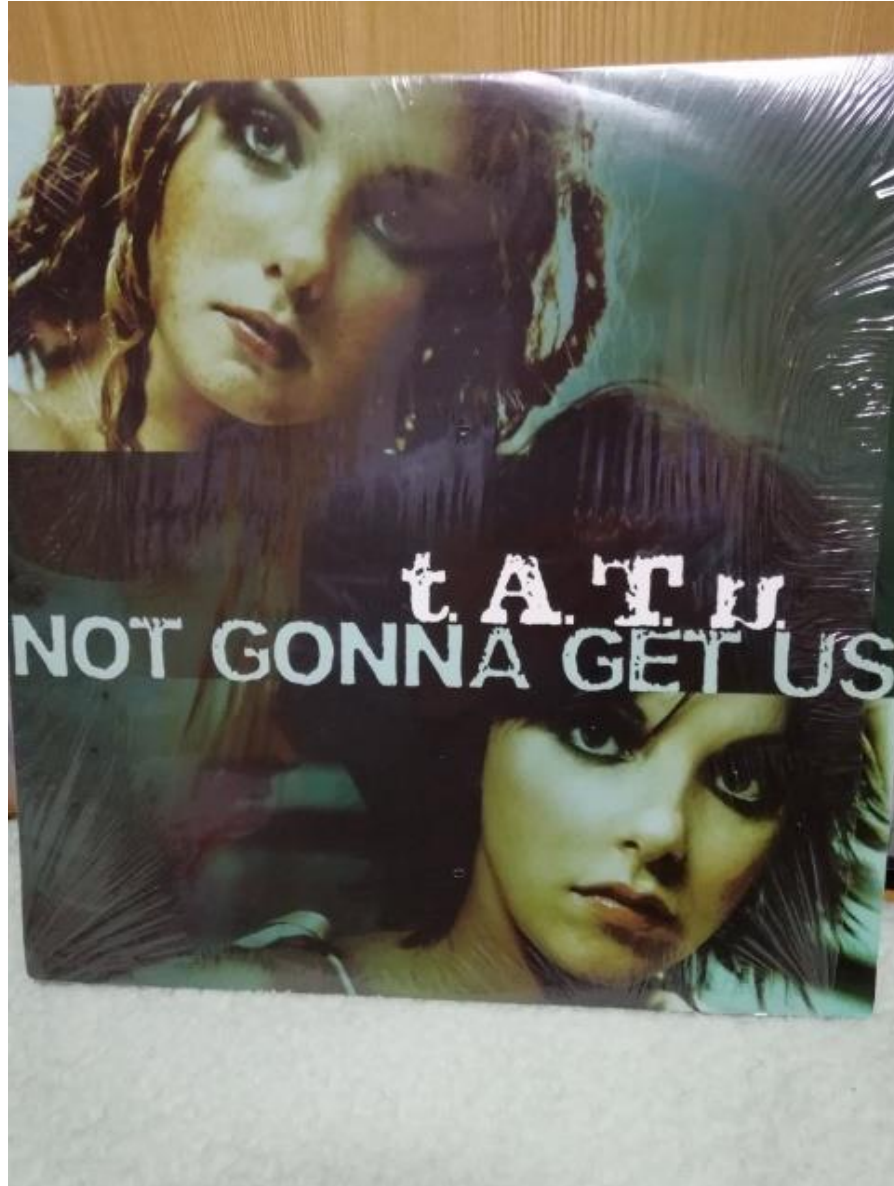
<https://ja.wikipedia.org/wiki/T.A.T.u.>

バグルス、エイジア等のプロデュースで知られるTrevor Hornのプロデュースで、西側資本主義世界でブレイクした女性二人組。

ちなみに、2003年(日本でブレイクした年)のユーロビジョンのロシア代表。

2014年解散。

t.A.T.u.



## 2.ソ連解体後の音楽シーン(5)

- EUの分裂

基本的に共産主義体制解体後の旧ソ連東欧圏は文化面において西側諸国のポップカルチャーの吸収が史上命題だった。ところが、EUが拡大し、東欧が加わると、EU参加国間の格差が問題になってきた。東欧圏はシリア難民の受入口(シリアと陸続き)となっており、西欧を目指す難民の通過点として大きな負担を強いられていることも格差拡大の要因となっている。音楽フォーマットが西側音楽の影響は残しつつも、歌詞などの面でロシア東欧の独自性が模索されることに。

## 2.ソ連解体後の音楽シーン(6)

- コロナ

コロナ感染爆発は、多少難民移動問題を和らげたものの、そもそも東欧諸国も西欧経済への依存は大きく、東西EU間の格差に変わりはない。

# 3.ロシア・東欧のレイヴシーン(1)

- OZORAフェスティバル(ハンガリー)

ヨーロッパのレイヴシーンはこれまで地中海の観光島が支えてきた。つまり、バカンスの1つとしてレイヴカルチャーが成長してきた。

その一方、レイヴはキャンプを伴い、宿泊道具などの運搬で車が必要。レイヴのニーズは大陸に移り、イベリア半島先端や東欧の内陸部でレイヴが盛んになっている。その中で、ポルトガルのBOOMなどが登場、さらにハンガリーのレイヴパーティ、OZORAフェスティバルは日本でも定期的に行われている。



# 3.ロシア・東欧のレイヴシーン(2)

- イギリスのレイヴ復興

EU離脱による混乱で若者の不満が高まり、サッチャリズムの80年代パンク登場時代と同様の政治状況に。

- ロシア、ウクライナのレイヴ・リヴァイヴァル

親露派、親EU派の分裂で旧東西ドイツのような社会状況。

※参考:レイヴカルチャーとは何だったのか

<https://iamtsumu.hatenablog.com/entry/2019/02/03/220053>

LITTLE  
BIG

# Little Big(1)

[https://en.wikipedia.org/wiki/Little\\_Big\\_\(band\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Little_Big_(band))

・基本情報

メンバー:

Ilya "Ilich" Prusikin

Sergey "Gokk" Makarov

Sonya Tayurskaya

Anton "Boo" Lissov

# Little Big(2)

- Discography (albums)
  1. With Russia With Love (2013)
  2. Funeral Rave (2015)
  3. Antipositive Pt.1 (2018)
  4. Antipositive Pt.2 (2018)

# Little Big(3)

デビューは2013年。

当初はパンキッシュなスタイルのレイヴバンドであった(レッドホットチリペッパーズやプロディジーの影響を受けているとのインタビューあり)。デビューアルバムツアーですでにヨーロッパや北米にも遠征している。

カテゴリ的にはレイヴバンドと言うことになっている。しかし、さまざまなスタイルのパフォーマンスを行っており、一筋縄では行かない。

# Little Big(4)

## ● 政治性の強いメッセージ

- LollyBomb (2017)

<https://www.youtube.com/watch?v=FBnAZnfNB6U>

同じ共産圏で友好関係があると思われるが、北朝鮮との関係は実際には実にシニカルだということが分かる。

- AK-47 (2018)

<https://www.youtube.com/watch?v=-QHha1zko1A>

ロシアの軍需産業(カラシニコフ銃)をディズニー風アニメで皮肉るという内容。

# Little Big(5)

## ● 過激な性的表現

- Big Dick (2016)

[https://www.youtube.com/watch?v=i63cgUeSsY0&has\\_verified=1](https://www.youtube.com/watch?v=i63cgUeSsY0&has_verified=1)

ズバリ、イチモツについての歌(18禁)。こんなバンドをユーロビジョンの代表に送るロシアって国は(笑)。

# Little Big(6)

## ●・ロシアへの愛国心、および反発

- Everyday I'm drinking (2013)

<https://www.youtube.com/watch?v=QrU1hZxSEXQ>

J-POPでも愛国系のアーティストはいる(椎名林檎が和装でステージに立ったり)が、同時にアイロニーもぶつけるところがインターナショナル。



# Little Big(7)

- 音楽アーティスト以上に、YouTubeパフォーマンスアーティスト

YouTubeで観る限り、音楽フォーマットはレイヴミュージックをベースにしている一方、Music Videoの面白さを常に追求するコミックポップロックバンドの側面が大きい。

→自称「風刺アートパフォーマー」

# Little Big(8)

- Little BigはYouTube時代の電気グルーヴか？  
MTV全盛期にも、ビデオクリップの実験的作品は多数あった。

しかし、YouTubeの時代は、アーティストのアイデアが商業主義のフィルターを通さずにダイレクトに作られ、公開されることが大きな特徴。電気グルーヴが平成のオールナイトニッポン(というラジオフォーマット)でやっていたような自由さが、ロシアと言う、かつて不自由の極みだったソ連時代の殻を完全に突き破って(今度はYouTubeフォーマットで)このようなアーティストが登場したことは極めて興味深い。

# Little Big(9)

- Little Bigにとっての「風刺」とは？

風刺、皮肉、挑発、不謹慎、猥雑、その他下品で不快さすら残すミュージックビデオを次々と残すLittle Bigとはなんなのか？

上記のようなイメージはパンクロックに最も相性がいいが、少なくとも現代はパンクロック全盛期ではない。

また、安っぽいYouTuberならこれらのステレオタイプのイメージを売りにしている連中はネット上にゴマンといることも周知の事実だと思う。

しかし、彼らはそことは一線を画す何かがある。でなければ、デビューアルバムから欧米ツアーを敢行なんて不可能だったし、Eurovisionと言う国対抗の音楽コンテストの国代表になれるものではない。とにかく、彼らはこの下品さを貫くことで、ロシアと言うポップミュージックマーケットの辺境から欧米でスターダムにのし上がったバンドなのだ。

いずれにしても、彼らはこういう昔からある安っぽい炎上ネタをさらに風刺して、狂気と言うものをさらに一段深く掘り下げているように思われる。

※参考 Little Big : 不快な気持ちになるかもしれないが、間違いなく頭に残るイカれたやつら

<https://jp.rbth.com/arts/81085-little-big-ikareta-yatsura>

# Little Big(10)

## • ポストレイヴミュージック

レイヴと言えば広い屋外で星空や太陽を眺めながら踊り狂う、と言うのが相場だったが、コロナ感染爆発で当分は屋外レイヴはまともにできそうにない(まあ、もともとレイヴなんて普通の人々がレジャー感覚で近づける空間ではないが)。

しかし、Little Bigは徹底的にYouTubeでバズることにこだわったMVをリリースし続けている。YouTubeはむしろ“おうちで”楽しむものだ。レコード会社がアーティストにメジャーマーケットにも進出できるよう仕掛けたというより、彼ら自身がユーチューバー的資質と指向(レイヴミュージック好きだけでなく、勉強机の脇にスマホを立てて楽しむような層にまでリーチするコンテンツを提供)をもって作品制作に携わっているように思える。

個人的には、難解で演奏技術や楽曲のクオリティを前面に出したプログレッシブロックに対し、“Autobahn”で牧歌的、ヒーリングミュージック的なアプローチをしたKraftwerkに通じるものを感じる。これはちょっとしたアンチテーゼだ。もしこのたとえばは分かりづらいとしたら、たとえばAKB48あるいはEXILEから発生した日本の歌って踊るアイドル文化が、K-POPと言うフィルターを通じてインターナショナルなクオリティにブラッシュアップされた例も付け加えておきたい。

いずれにせよ、ここからポストレイヴミュージックへのパラダイムシフトが始まるのではないか？

# 5.結論(ネット配信時代の音楽1)

## ●ピコ太郎を超えるLittle Big

- UNO (2020)

[https://www.youtube.com/watch?v=L\\_dWvTCdDQ4](https://www.youtube.com/watch?v=L_dWvTCdDQ4)

ジャスティン・ビーバーがつぶやけば(笑)間違いなく日本でもブレイク可能な分かりやすい面白さ。

再生回数1億回を超え、21世紀のユーロビジョンエントリーアーティストで最も成功したアーティストになると思われる。

# 5.結論(ネット配信時代の音楽2)

- ロシアは遠くない
- SKIBIDI (2019)

<https://www.youtube.com/watch?v=mDFBTdToRmW>

ロシア本国ではこのビデオクリップでファンが“踊ってみた”動画を大量にアップした。このMVも再生回数4億回を超え、ロシア人アーティストの史上最高再生回数となっている。

日本でも逃げ恥ブームの『恋ダンス』などで同様の現象が起きており、日本でも受け入れられる素地は非常に大きい。

КОНЕЦ